



132986



日文 701740553

信誼久孝

美善集注釋



卷第十四

中央公論社

萬葉集注釋卷第十四 奥附

昭和四十年三月十日初版 昭和四十八年十一月三十日十四版

著者澤瀉久孝さわだひさたか 發行者山越豐 印刷者高橋武夫 製版印刷所大日本印刷株式會社東京

都新宿區市谷加賀町一丁目十二番地 發行所中央公論社東京都中央區京橋二丁目一番

地振替東京三四番

定價千五百圓

本文抄造 三菱製紙株式會社

表紙麻布 望月株式會社

口繪コロタイ之 株式會社東京寫眞印刷所

製本所 小泉製本株式會社

製函所 加藤製函印刷株式會社

## 凡例

一、原本の傳はらない古典の注釋の底本としては、その原本の時代に近い古寫本か、世に最も廣く行はれてゐる流布本か、いづれかが用ゐられがちであるが、兩者に一長一短のある事、他の古典の場合にも既に述べられてゐるところである。

私はその兩者の長を採らうとして底本の二本立といふ事を思ひついた。定本萬葉集以來、西本願寺本を底本とする事が二三の注釋書にも行はれてゐるが、それは廿卷完備した最も古い寫本としてうなづかれる態度ながら、西本願寺本と流布本とは大體系統を同じくするものであるから、私は系統を異にする古寫本と流布本（寛永本）とを照合して、兩者の間に異同がある場合はその正しいと認められた方を採つた。従つてそのいづれか一本が誤と明瞭に認められるものは一々注を加へない。その底本とした二本以外の諸本、諸注によつて訂正したもののみ注を加へた。しかしこの卷にはさうした例は殆ど無く、たとへば奴とあるは、元（類）に「努」とあるが、類その他流布本まで「奴」とある事を示したものであり、由賀とあるは底本その他すべて「賀由」とあるが、略解の説によつて「由賀」の誤と認めたものであり、須（類）とあるは、流布本に「緒」とあるが、類に「須」とあり、西には「渚」とある事を示したものである。（類）續（西）渚

一、流布本と系統を異にする古寫本は殆ど廿卷完備したものなく、中には斷簡に過ぎないものもあるから、歌一首一首に

ついでどの古寫本を底本としたかを注記した。それによつてその歌の古寫本がどのあたりまで溯り得るかを明らかにし、訓詁の参考にすると共に、古寫本の新なる發見に備へる事も出來ようと考へたからである。たとへば原文の下に（類、六六）とある歌は、桂、金、天、元等の古寫本は傳はつてゐない事を示すものである。それら古寫本の時代については正確には定め難いが、本書に底本とするに當つては次の如き順によつた。

桂、金、藍、天、元、金砂子切、類、古、紀、尼、嘉。

一、古寫本の校合は複製本のあるものはすべてそれによつた。複製本に漏れたものは原本によつた。その場合はその所在を明らかにした。陽明本と京大本とは著者みづから原本について校合を加へた透寫本（著者所藏）を用ゐた。冷泉本、金澤文庫本、細井本、大矢本は校本萬葉集の注記に従つた。

一、原文の文字は大體舊字体（當用漢字体に非ずといふ意味）を用ゐたが、誤字考察のたよりを考へて、原文又は原本に近き書體と認められるものはそれによつた。「尔」(三三〇)、「礼」(三三六)、「与」(三三三)の如きである。

一、原文の下の注記（類、十六・六五）は類聚古集第十六卷六十五頁の意であり、（古、一・一五才）とあるは古葉略類聚鈔第一冊十五丁表の意である。古葉略類聚鈔の現存の巻は八、九、十、十二と、巻名不明の巻との五冊であるが、本書では複製本にかりに一、二、三、四、五と名づけられてゐるのに従つた。

一、「西」(右に青)、京(青)、細などヌカシ」とあるは、シの文字が青で書かれてゐる意である。

一、本文に引用の萬葉集の歌には番號を記した。（七二五）とあるは巻七にある一一七六番の歌である。卷數をあげないものはその注釋の巻の中の歌である。

一、萬葉集以外の歌集その他諸書の下に數字はすべて卷數を示す。日本書紀は卷數によらず單に神代紀上、神武紀などと

記した。古事記も中巻、下巻など書かず、神武記、仁徳記などと記した。伊勢物語は池田龜鑑氏の校本にも採用せられてゐる天福本の段数をあげた。新撰字鏡は天治本によつた。享和本、群書類従本によるものは(享)(群)と注した。「倭名抄」と書いたものは倭名類聚抄十卷本であり、「和名抄」と書いたものは同、廿卷本である事を示した。高山寺本は(高)と注した。類聚名義抄は(佛、上)(法、中)など注したものは觀智院本である。色葉字類抄(上)(中)など記したものは三卷本(古典保存會刊)であり、伊呂波字類抄(一)(二)など記したものは十卷本(日本古典全集所收)である。

一、書名を省略して引用したものを左に掲げる。

桂	桂本萬葉集	壬	傳王生隆祐筆本萬葉集
金	金澤本萬葉集	嘉	嘉曆(傳承)本萬葉集
藍	藍紙本萬葉集	紀	紀州本(校本に神田本とあるもの)萬葉集
天	天治本萬葉集	西	西本願寺本萬葉集
元	元曆(校)本萬葉集	細	細井本萬葉集
類	類聚古集	陽	陽明文庫本萬葉集(京都大學所藏。校本に溫故堂本とある類本)
古	古葉略類鈔	矢	大矢本萬葉集
尼	尼崎本萬葉集	京	京大本萬葉集(校本に京都帝國大學本とあるもの。曼珠院舊藏)
冷	冷泉本萬葉集	無	無點本萬葉集
文	金澤文庫本萬葉集		

附訓本萬葉集

寛永本萬葉集

仙 萬葉集注釋  
(仙覺抄ともいふ)

拾 萬葉拾穂抄

管見 萬葉集管見

代 萬葉代匠記

(引用にあたり平かなを用ゐたものは初稿本、  
片カナを用ゐたものは精撰本)

童 萬葉集童蒙抄

考 萬葉考

榎 萬葉考榎乃落葉

玉 萬葉集玉の小琴

略 萬葉集略解

檜 萬葉集檜端手

攷 萬葉集攷證

古義 萬葉集古義

註疏 萬葉集註疏

仙 覺

北村 季吟

下河邊長流

契 沖

荷田 信名

賀茂 眞淵

荒木田久老

本居 宣長

加藤 千蔭

橋 守部

岸本由豆流

鹿持 雅澄

近藤 芳樹

動植正名 萬葉古今動植正名 山本 章夫

美 萬葉集美夫君志 木村 正辭

文字辨證 萬葉集文字辨證 木村 正辭

字音辨證 萬葉集字音辨證 木村 正辭

訓義辨證 萬葉集訓義辨證 木村 正辭

新考 萬葉集新考

(安藤野雁と井上通泰と兩氏に同名の著書があるが、  
安藤氏のは引用するところが少く、單に新考とあるは井上氏のものである。それも歌文珍書保存會刊行のものゝ國民圖書株式會社刊行のものゝあり、主として前者によつたが、「増訂」と記したところは後者によつたものである。)

増、選 増訂本萬葉集選釋 佐佐木信綱

口譯 口譯萬葉集 折口 信夫

總索引 萬葉集總索引 正宗 敦夫

新講 萬葉集新講 次田 潤

新訓 新訓萬葉集 佐佐木信綱

講義 萬葉集講義 山田 孝雄

新解 萬葉集新解 武田 祐吉  
新釋 萬葉集新釋 澤瀉 久孝

(伊藤左千夫氏に同じ名の著がある。その場合は著者の名をあげた。)

私解 萬葉集私解 花田比露思

全釋 萬葉集全釋 鴻巢 盛廣

難語難訓攷 萬葉難語難訓攷 生田 耕一

秀歌 萬葉秀歌 齋藤 茂吉

評釋篇 柿本人麿評釋篇 齋藤 茂吉

雜纂篇 柿本人麿雜纂篇 齋藤 茂吉

新見 萬葉集新見 森本 治吉

講話 萬葉集講話 澤瀉 久孝

小徑 萬葉集小徑 土屋 文明

古徑 萬葉古徑 澤瀉 久孝

作品と時代 萬葉の作品と時代 澤瀉 久孝

新校 新校萬葉集 澤瀉 久孝  
佐伯 梅友

定本 定本萬葉集 佐佐木 信綱  
武田 祐吉

論究 萬葉集論究 第一輯 松岡 靜雄

染草考 日本上代染草考 上村 六郎

植物新考 萬葉植物新考 松田 修

動物考 萬葉動物考 東 光治

續動物考 續萬葉動物考 東 光治

兵庫篇 萬葉地 兵庫篇 坂口 保

大和志考 萬葉大和志考 増田 徳二

山代志考 萬葉山代志考 奥野 健治

全譯 全譯萬葉集 武田 祐吉

全註釋 萬葉集全註釋 武田 祐吉

(改造社版と角川版とがある。本書は主として前者によつたが、増訂されたところは後者によつた。現代かなづかひになつてゐるものは後者よりのものである。)

評釋 萬葉集評釋

(橋田東聲氏、金子元臣氏、窪田空穂氏の同名の書がある。本書には著者の名を附して引用した。)



評釋 評釋萬葉集 佐佐木信綱

(これも著者の名を附した。)

歌人の誕生 萬葉歌人の誕生 澤瀉 久孝

大成 萬葉集大成 平凡社版

古典大系本 古典文學大系本萬葉集 高木市之助

私注 萬葉集私注 土屋 文明

五味 智英  
大野 晋

一、本書へ引用の雜誌名で、同名が他にもありなどして疑問をもたれるかと思はれるものの發行所を左にあげておく。

國 文 學 關西大學國文學會

女子大國文 京都女子大學國文學會

山 邊 道 天理大學國文學研究室

一、引用の諸書の文章は文字もみだりに變更しなかつた。但、假名に一切濁點を用ゐないものは、馴れない讀者の不便を考へて濁點を加へた。仙覺抄、代匠記などの注の如きである。

一、現代諸家の題目には「」を加へ、單行本には『』を加へて區別した。

一、上代特殊假名遣については本書中それぞれの場合に當つて述べたが、初學の方の爲に、萬葉ではア行のエ(衣)とヤ行のエ(延)との區別の他に次の十二音の區別があつた事を列舉しておく。

(甲類) 伎、祢、古、蘇、刀、努、比、敝、美、賣、用、路

(乙類) 紀、氣、許、會、止、乃、非、閑、未、米、余、呂

萬葉集注釋卷第十四



萬葉集卷第十四

東歌

上總國雜歌一首 (三〇) ..... 八

下總國雜歌一首 (三一) ..... 一〇

常陸國雜歌二首 (三二、三三) ..... 一一

信濃國雜歌一首 (三四) ..... 一五

遠江國相聞往來歌二首 (三五、三六) ..... 一九

駿河國相聞往來歌五首 (三七—四一) ..... 二三

伊豆國相聞往來歌一首 (四二) ..... 三三

相模國相聞往來歌十二首 (四三—五四) ..... 三四

武藏國相聞往來歌九首 (五五—六三) ..... 五一

上總國相聞往來歌二首 (六四、六五) ..... 六一

下總國相聞往來歌四首 (三六—三九)	六五
常陸國相聞往來歌十首 (三六—三九)	六九
信濃國相聞往來歌四首 (三六—三九)	七九
上野國相聞往來歌二十二首 (三三—三五)	八六
下野國相聞往來歌二首 (三四、三五)	一〇
陸奥國相聞往來歌二首 (三六—三九)	一四
遠江國譬喩歌一首 (三九)	一七
駿河國譬喩歌一首 (四〇)	一八
相模國譬喩歌二首 (四三—四四)	一九
上野國譬喩歌三首 (四三—四五)	二五
陸奥國譬喩歌一首 (四五)	二八
未勘國雜歌十七首 (四六—四八)	三〇
未勘國相聞往來歌百十二首 (四九—六一)	一五三
未勘國防人歌五首 (五九—六一)	二六四
未勘國譬喩歌五首 (五七—六一)	二六八

未勘國挽歌一首(皇七)……………二七三

口繪

元曆校本萬葉集

寫眞目次

稻村崎・小動崎……………	四三
稻瀬川……………	四四
うけらが花……………	五五
足尾山……………	七二
戸倉附近の千曲川……………	八五
多胡碑……………	八八
安蘇のまそ群……………	八九
新田山……………	九五
佐野の舟橋跡……………	一〇八
三龜山……………	一一一
秋山川……………	一一三
安達多良山……………	一一六

おきな草……………二二一

圖版目次

相模灣をめぐりて……………四九  
多摩川流域……………五二  
伊香保・碓氷……………九七  
赤城山……………一〇〇  
三龜山・新田山・阿蘇川附近……………一二二

## 東 歌

この標題はこの巻全部にわたるものである。この巻には東方諸國の歌二百卅首——そのうちには或本又は一本の歌として一首の全形を載せたもの八首を含む——を収めてゐる。はじめに國名の明らかな作を雑歌（この標題は落ちてゐる）、相聞、譬喩歌にわかち、東海道は遠江より、東山道は信濃より以東——この範圍は防人の範圍（廿三左注、四三左注）と一致してゐる事が注意せられる——の作を集め、次に國名を明らかにしない作を、雑歌、相聞、防人歌、譬喩歌、挽歌にわけて載せてゐる。

この巻の編輯者については佐佐木信綱博士はその著『和歌史の研究』の中で蟲麻呂の輯録にかかるものでないかといふ説を述べてをられる。蟲麻呂が常陸風土記の編纂に關係したであらうといふ事は私も述べた事があり、この巻に常陸の作の多い事も認められるが、上野の國の歌は更に多く、その他多くの國々の作を、常陸に在任したといふだけで蟲麻呂の編



纂と斷ずる事は出来ないと思ふ。ただこの巻の最初の蒐集者は不明であるが、今日見る如き形に編輯したのはやはり家持でないかと私は考へる。

山田孝雄博士は「萬葉集の編纂は寶龜二年以後なるべきことの證」(心の花 第十八卷、第十二號、『萬葉集考叢』所收)として、武藏はもと東山道に屬してゐたのが寶龜二年東海道に編入されたのであるが、この巻の國名の順序が武藏が相模の次にあつて東海道にはひつてゐるからだと云はれるのである。さうした整理を加へた時期として參考せらるべき説である。

この巻は卷五の大部分と同じく地名のほかは一字一音の假名書になつてゐる。しかし音假名ばかりでなく、正訓の文字も用ゐられてをり、書替が行はれたと想像せられるもの(三言)がある。假名書になつてゐる事は東國方言を傳へようとした用意として尊重すべき處置と云へる。

三言 奈都素妣久 宇奈加美我多能 夏麻引く 海上瀉の

於伎都渚尔 布祢波等杼米牟 沖つ渚に 舟は泊めむ

佐欲布氣尔家里 (類、十六・六五) さ夜更けにけり

【口譯】 海上瀉の沖の洲に舟は停泊させよう。夜が更けてしまつたよ。

【訓釋】 夏麻引く海上瀉の沖つ渚に——既出(七・七三)。「夏麻引く」は枕詞。「海上」は、前に述べたやうに、和名抄(五)

郡名に上總國海上上字奈加美、下總國海上上字奈加美とあつて兩國にある。上總の方は海上郡と市原郡と合して市原郡となり、今千葉縣市原郡三和町は、海上、市西、養老の三村が昭和卅年合併したものである。下總の方は今も海上郡となつてをり、利根川の河口の西岸、銚子市と旭市との間に海上町がある。この作には「上總國歌」と左注にあるから上總の海上と見るべき